



繪本太閤記
八編

伊18
1853
56



特 13
1833
巻 56



繪本左圖記五篇卷之六

目録

ぶらり火乃説

政津通川そ毫毒を救は圖

ぶらり火の圖

佐々成政降参三活

富山の城外曲輪破さく奉丸よき籠

三方勢と防ぎ戦入圖

佐々成政降参乃圖

秀吉云親老の難石と凌ぎ城後又極治入圖

五篇卷之六

大佛殿經始之活

大坂より後伏見へ材木と積登る國

本食具山樺樵より巨材と受く國

大佛造管國より大石坂系都より入國

大佛殿成純の國

賜佐陸奥守肥後國活

千利休の妻秀文の國

小政不之儀

後君之儀

繪本右衛門記五篇卷之六

ぶらり火乃説

人いふやぶらり火乃説は必妖あるに落み歸りて多しは豊るに時ハ

妖氣自然うとあるは故人曰妖ハ人ハ申と興ると宜かる哉

津通川の合戦は成政小勢を以て大軍に對戦ひしを以て

いふは怪風記に教方の幽鬼殿と出他人の目より見えたり成政二

人を若しと忽放軍とありしは妖怪の業を以て少くを謂ふこと

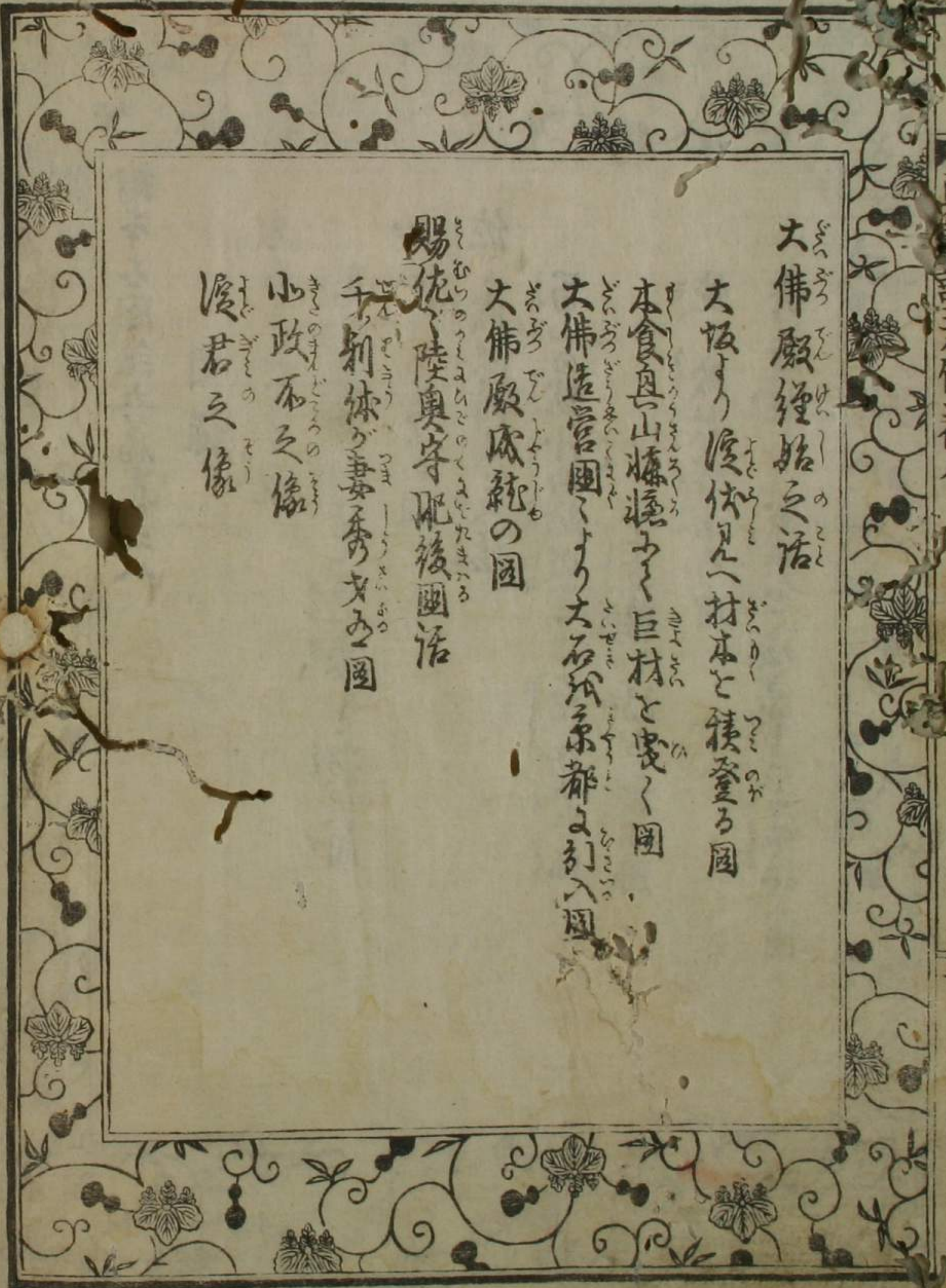
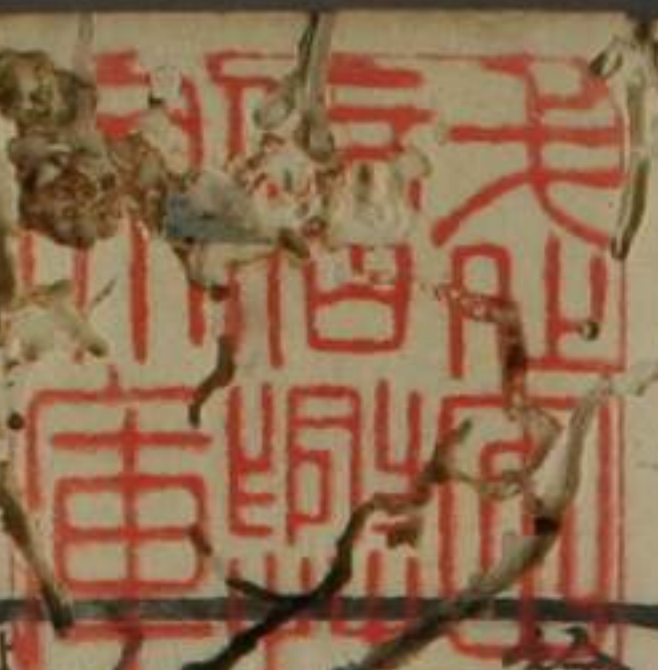
あり成政は陸奥守成政誠中園を揚り富山に在りしを以て

乃愛まあり名成政百合と有り天正十二年の冬此妻禿るの

成政は成政大いさむ角に有りしを以て寵偶日は勝る時十月

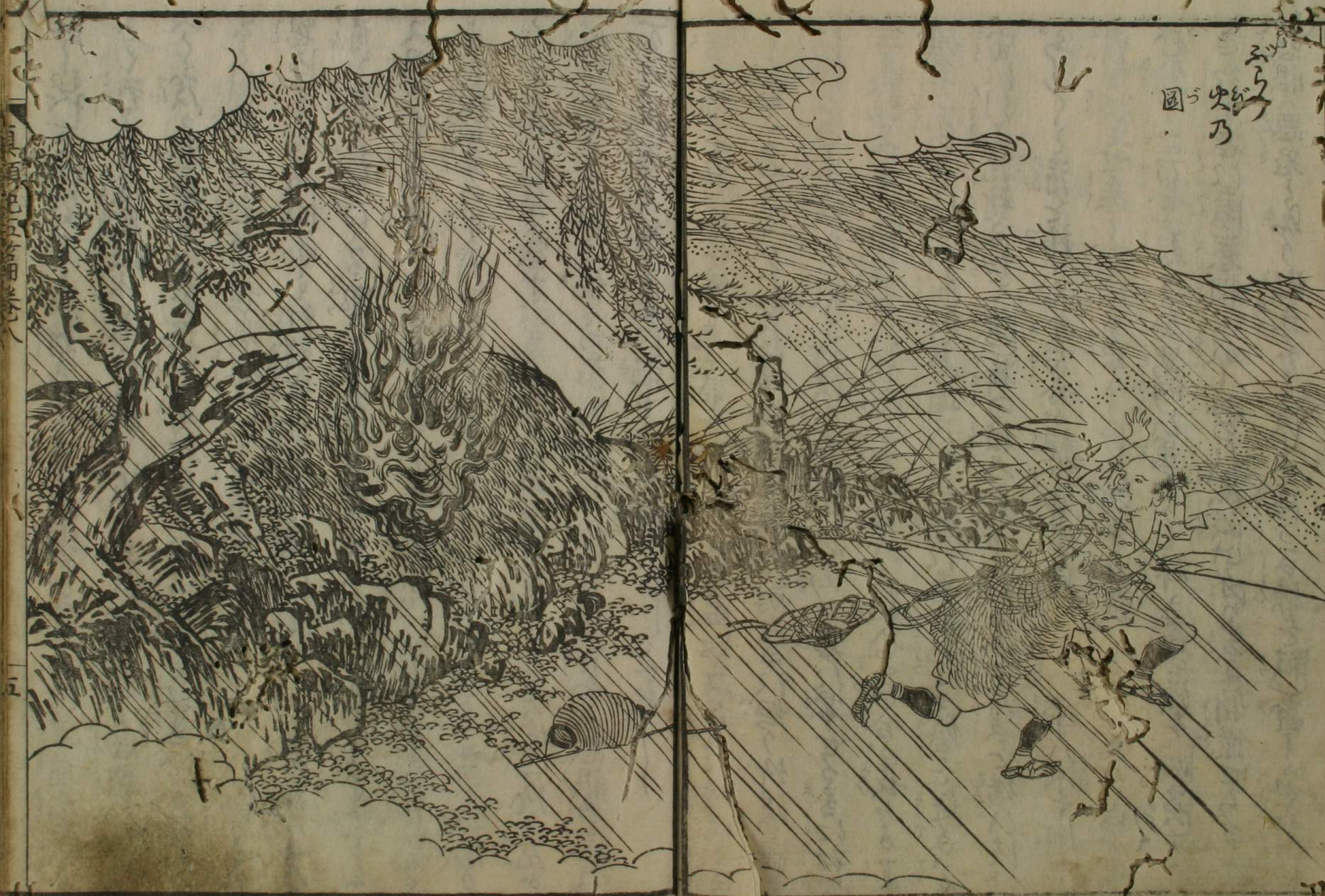
成政は成政大いさむ角に有りしを以て拒と討んと近智の勇士建部

成政は成政大いさむ角に有りしを以て拒と討んと近智の勇士建部



其庫改を先とし有合者又十余人引連雪中にまゝく城と清
其甲斐後河は初て幸と斗る此時竹は然即とる小庵後一人痛
其方りそ其仇は後り富山の城は初り止まらぬ政何と申
其神に見はるれは急なるおほく其怪はあまの御子
御地けるは初めは妻は百合の御子三人ありは乃妻は百合が
寵愛日と傍り初は始と庵後竹は然即密に百合に通其情
を初後て今も竹は然即密に百合に通其情を
ついにしはるれは急なるおほく其怪はあまの御子
に何と申そを幸とあけははるぞそ方んと其い唐人の諺ると
此物と然且成政は百合が園の果はよくは神の嫁衣裳を捨り茶坊
ととめく其妻は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を

等が深と竹は然即密に百合に通其情を
ととめく其妻は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
三三式すのまは物接おに斬敵也に廣式は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
松を尤のまは物接おに斬敵也に廣式は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
宙に引と控斬ぬ切て遊柳の枝乃垂りたる小庵後竹は然即密に百合に通其情を
ふとくと首と鈴は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
首と初とせ悉く獄門は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
む竹中は百合が死とる時罵叫は初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
き紅顔忽に霞と悪相と初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を
怨恨の悪鬼と初めは始と庵後竹は然即密に百合に通其情を



ふらふら
火の
圓乃

黄泉
語
卷八

黄泉
語
卷八

せしむと叫びさうに物さうり刃を斬者目をあひいば者毛髪う
ごくさう後城改津通川と涉り軍とあはれり度し勝利のるは
かく度う摩惠多が家村奥村のあ人み鋒先をおと今日ある者
とと對陣の所敵方の熱意あはしとよ百合谷にさ候が熱念うと
思はしとあうは今も狐中富山津通川の邊に凡雨の夜に女乃
首と斬て釣げさる貌乃鬼火あはし出る狐去人号けてさうり火と
又凡雨のさき候とせしとあうくと大夢に叫びけさうり火あはし
うと敵百多の早霜と候とせしと一念の熱意あはしとせの人の流り
ごとくあう後天十六奉佐く成政百合の花よりあはし候とあ
勝にせしと自殺し佐々のあ敵殺せしとあはし百合が熱眼のあ
不方りしとあはし後の事記と案の説としてしとあはし

佐く成政降参

去後よ秀吉乃先手の勢又万余誇り明ふ久利加羅作一押参團と
他つと攻げさるは不山國を双の切所さる久利加羅の要害と築き置
軍と籠居せし城より夫炮と飛きまじく坊と戦ふ後よふ大
軍とあはしと攻めはれり候とあはし居りさるふ富山の城
又馬乗り秀吉旗本の勢に万余と引率し候よりあはし富山の城
へさうあはし津通川の合戦味方勝利を失ひ脱し居城よ及んと
まう来て後治法と追ふよあはし久利加羅の要害と築き置
い城はよあはし者殺をさるはあはし勢城中のさうりとあはし
あはし大軍の所勢佐くが本城を囲とさうりとあはしと一妻と攻め
せし大軍一日は圍と作り殺炮火箭を頻と飛し短兵急よあはし



破
曲
論

幸
上
方
勢
と
流
ぎ
我
人
國

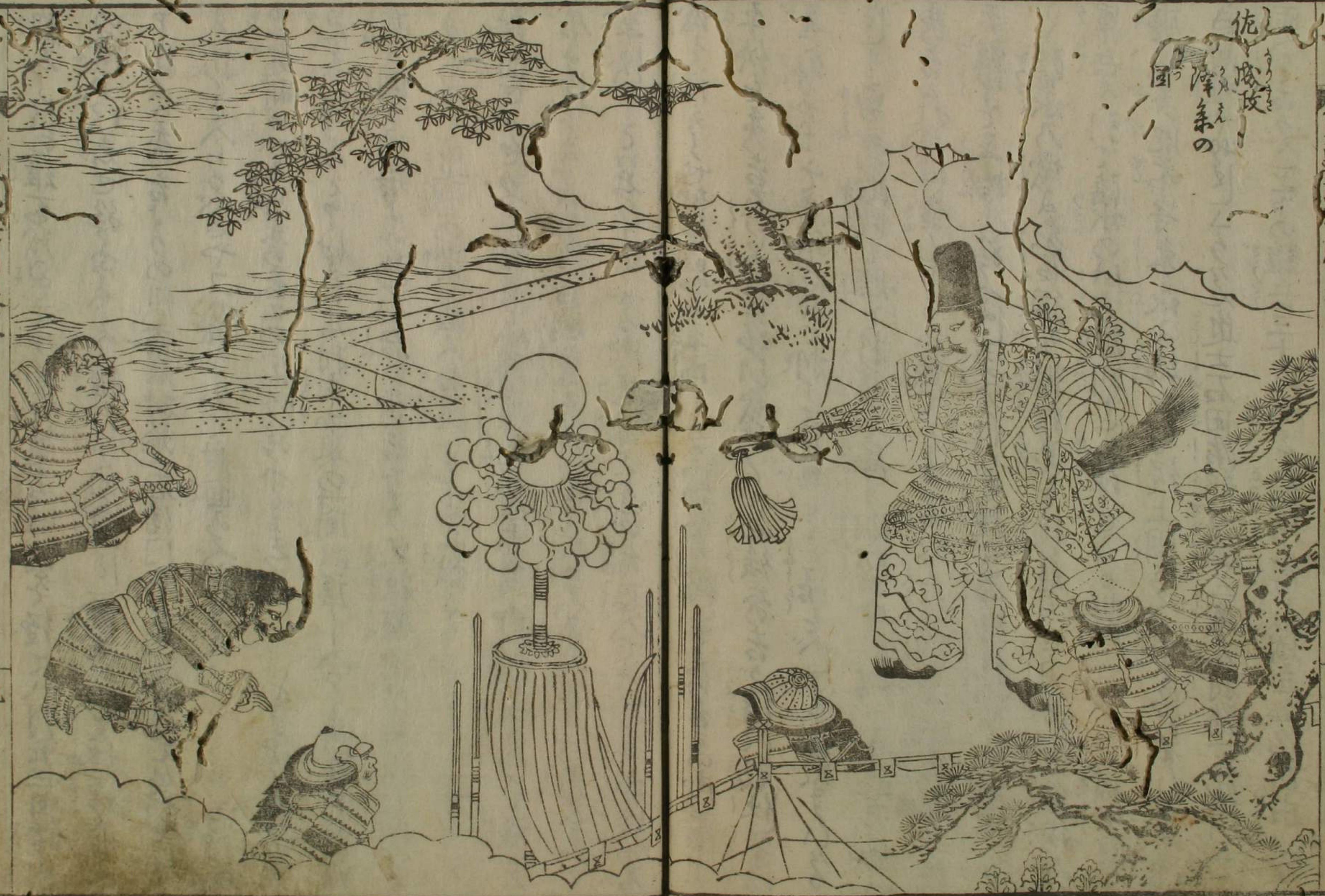
東
山
記
卷
八

大
本
堂

此れ教まの城兵敵を前後よりけととも防戦するはと我一
城を打捨富山の方約もあつづくとしてと定めなく足はまうせ
追て切之富山の河勢に加うたるは僅ちる一敵とす万の大軍は
籠閉の防ぎ居るううつ依て城改今も是と城は火をうけ切後と
の思ひが先に津通川にて怨鬼のあり軍破と成政の若くは
の怨によりをに家滅と云ふもに押しき次分る如隙を乞て
其若く旗本に集りおる人等もお懐せむやと思ひたるは其れは陣
後者を逃し種々に言ふに可まづに款き幕下たりんと取ひけ
と云ふ若も成政の勇を押ししは路を免(堀尾)堀尾若力若勝と云

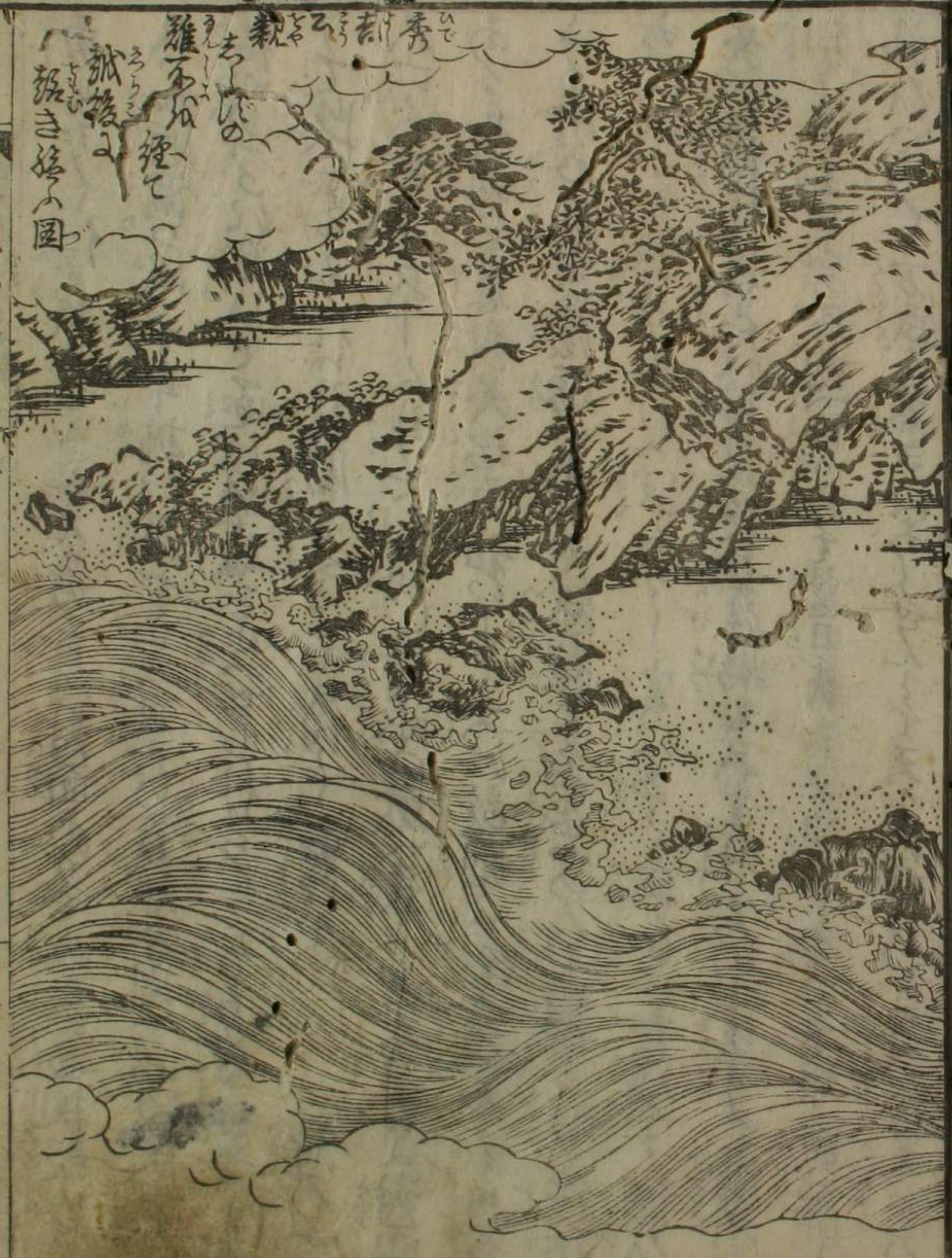
城を請ふせ城申既み平治の成政自傳にて其若くの御前
平伏と云ふ若くお笑ひせ給ひ城攻く向後其若く傍に勤仕茶坊
と勢を下して成政が髪と剃せ石具と上居ととぞのたすむる
しも勇武の成政も腰と打膝を屈し羽打の中にははるる備
其若く武蔵守多永と編りそ候上國のみきと佐出は化多源
吉城申と平治一終ははし使たるはを競り南國(丸)入せんも計ごと
く踏水乃城は須賀修理亮を指籠らる自外一万余騎乃
軍兵を引て踏水のけ方厭川と出陣せらる此所其若くは城中國
廢慮多肥前守多永と編りそ候上國のみきと佐出は化多源
其思惟や抑はしりらん近士石田治部が浦三城本村弥一右衛門と
其を石と上下の雜兵三十八人にて城申富ら瓜立出給ひ市振

佐
渡
河
の
戦



船を以ての難を以てさきう回致返す味川を経て八月廿三日清水
 の城に於て給ふ事より難兵二人を殺し城を須賀修理亮よ
 中給ふ事あるより後若木村跡一右衛門を以てありて此門を用
 じ拓き入りりるべきや又い城を出て対面みえき中へ入りて此の修理亮
 又遠州に三出秀吉云の宿り給ふ事より城宿一宿り本村殿
 見糸侍んとやけい本村三出奥の一間に宿り入り秀吉云修理
 亮の例を以て居り居り秀吉方より上杉殿へ申し中宿と云
 りありて近習の者一二人お具し是と云然り云日との城へ遊
 対面せしめしと云る小修理亮秀吉云の御意をつましく詠免
 居りしがまがらうかき羽柴云と云るしが大きに怒りき此を以て
 卒伏しこいといふる御事と云の旨忍入てい保百人彦勝石

背の某とていれけし守りしに指差れいとい御上と云と云しをい
 恐と云うるま目らへ通じなは候とておぬり不申し強て御通り
 ありきに於て其が着と制らるる後より御意なりといふに某が
 織よりそいなりし秀吉云おぬり給へ上杉より故謙信の遠見御
 事と云る人を持しし急後を以てい有彦勝へ進みはそ
 返りみえと云は城申しに御意と云しと云らるるに修理亮謹
 かこすり秀吉云と城申しに御意と云まぐに食應なり後者を以て
 麻川の幸陣へくこ中送りたるに彦勝も心懸き家信を以て御意
 せしめしなり小或い打殺して後の其の除き給へといふもあはれに
 守りの智恵の輩の秀吉云一人出陣し来りたる内より己が大事を
 心外にこれ候を表して出陣を以て来りたるを討人の



秀
山
親
雅
不
成
經
七
誠
後
子
振
三
子
小
園



真
景
言
五
篇
卷
八

勇も力く仁義もなき先秀吉に對面ありて
其和睦調りて年揃に及ぶも一旦秀吉本國へ送り
後其らに戦ひと遂げ雌雄と定せられんことを勇
もて以て帝に上りて薩勝を乞ふは日ど其口を
又六人歩卒五十人斗り其水の城へ素ら
ある秀吉云應對英法軍和して文に款國は居るの心
ある河内城は薩勝にあり怒勅を遣左右の人を
あつたも密にゆりしは人かゝる實にわく西家の
秀吉が神富にゆりゆりしは薩勝も又里斗り
其日よの居城へゆりぬるは日秀吉大軍と
ゆりゆりしは萬民を安きにありせんことを
著と近臣の中に撰りゆりしを面々にい
少弼永昌増田右衛門尉長盛石田治部少輔三
其補正家を又身好と定りゆりしは直制書を
貼る其書曰

主以爲所可代可掌法中洛外之雜事亦祠佛宇之事
正家可掌貢賦租稅計會之事永昌長盛三氏投論諸
事勿使有不若勿使諸人抱勞困乏情大少則又人相
議而定之小少則一人二人相議而決之群國之及教
等可速議折之莫敢遲緩焉勅決獄訟慎而聽之勿變
當者勿輕責者若其聽之不明則天下之汚名生矣
諸士各可悉病根病根有三其一則私欲枉曲其二則

以私怨故密謀殺其三則多終令銀沉湎于酒飲貪
其各親于牀第且嗜厚味是三者人之病根也推其所
原自則貪慾之在諸士慎而懲之則受人之餽亦
或不妨矣然所富者若甚貧等之贈物者雖甚多而莫
固受之此名條諸士休長

かくこといふは惠く國人と活る人いふに万歳をうひむ
にふ秋を唱目出なりとふ時代かりたり

大佛殿經始

天正十一年の冬十二月圓白秀云云政大臣に任せらば羽柴の姓
を改めて豊后に移居是年秀云云東山に大佛殿を築せたり
又その面々たる夢らまはるるいふ大佛殿の經營り二十年と

歴て成終せり 雲うけなむは女中知をばさくみ年にして其功を

今と長とそいふのく又を幼衆を以法印が宅に集りたまはく

お後なる小先由南郊の大佛師宗真法印其牙宗印法眼

并に番匠の棟梁ををさせ佛像及び大殿廻廊山門禪樓等大

概の積書と徳ありさそ希きま掲げたる小材木のも配りや先み

せんれ佛像の造作を先いしるやと同終るを以又退いて是と保

後し不冷い巨材をよく集りて速に功を成ごりんとて先

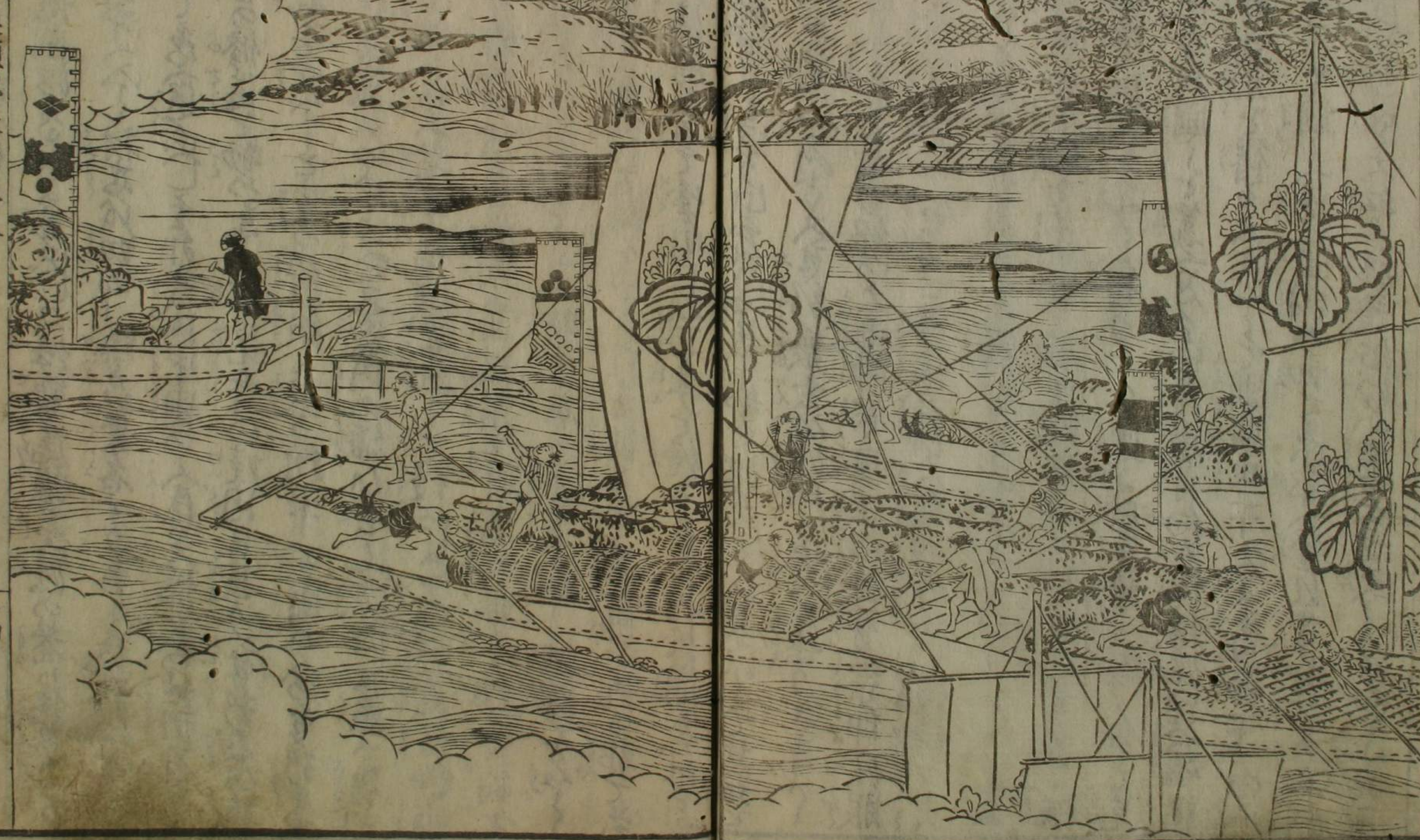
大木と代るる圓くと多入る小薩摩日向去依信徳の破祖紀

及の態好良本と得るぬはとて則監吏二十人又番匠二十人

ま三百人がそ圓く「港」巨材を切て系部へ登りて下知に日九圓に

國の國民材と大船は積難波の小漕舟をせまうそと小舟は

大坂
のり
依り
材
積
登
國

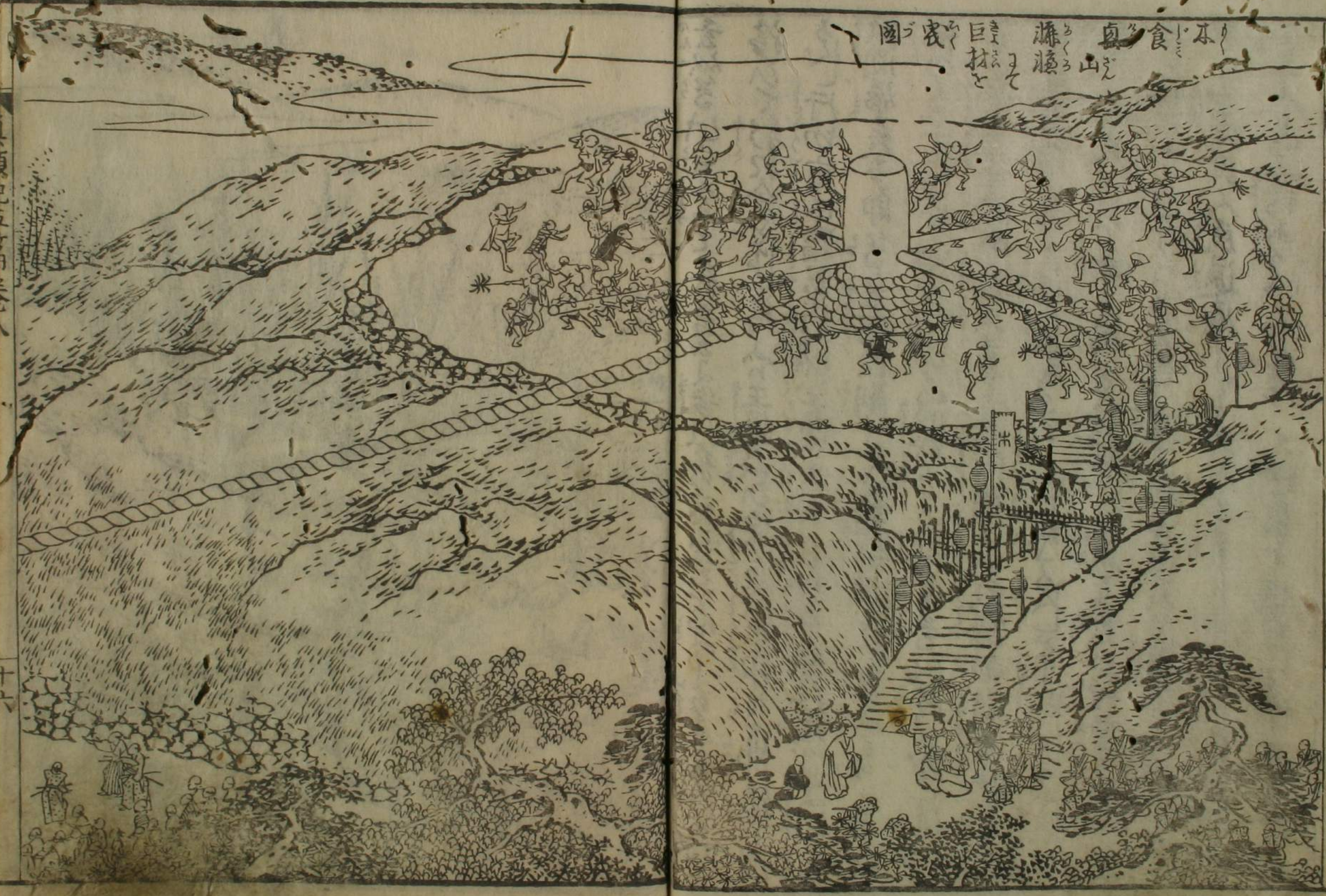


東海道五十三次

東海道五十三次

かつて國邊を羽まきどし又修勢尾張吳波の若く犯さるは
 波瀾の山中へ今材木切出勢方來名より是も難波に大波
 せ落て東送さばしを外畿内中國の人民大佛殿の地形石を
 築山等の修造と勅め東山佛光寺の境内に集りせり及び
 海東の下知をばべりと定めんは後所二十ヶ國又人のせりま
 今とけし系部いりしを又畿内の賑ひを人方は「定ま唐
 の佛巧王退とら若者後國來舶して住るは石田三波安は彼
 若とて像地の地を紹回し又彼若者若て凡巨佛を造り又銅と
 へんく鑄まれば既新とるの晩一ある本像とあり漆膠を
 是と塗金箔及び五彩をぬてこれを飾る中華佛と作る都て是
 ちり凡漆膠を塗る塗師の數百奉と傳るとも持以崩とん
 去んけ言をて乘者よ昔の乘者よとゆへに
 移して新に今とけし移し王退及び宗貞宗印等佛像と作
 るは片切市正糟谷内膳い富田兵部少輔寺西院後より川馬
 院間修表を即ち移り削して大殿經始とす事のみ廿六
 佛のよ廿六丈をよ一すの向式あり今も是に改めば漆膠
 ち水及漆の今舟宗之とを彫國の牡鶴鼓板万儀と集
 池田後中守上回水多き副級とす下と移し依
 修り修修くとあり國と僧尼人夫と聚り經營又よ
 已修も限りなき大宇建之のゆるれが容易に成れ
 とて是に人民退屈して入にたる室よ多神の本食取
 山と人とい傳ありけり度く大伽藍と造營し年れり

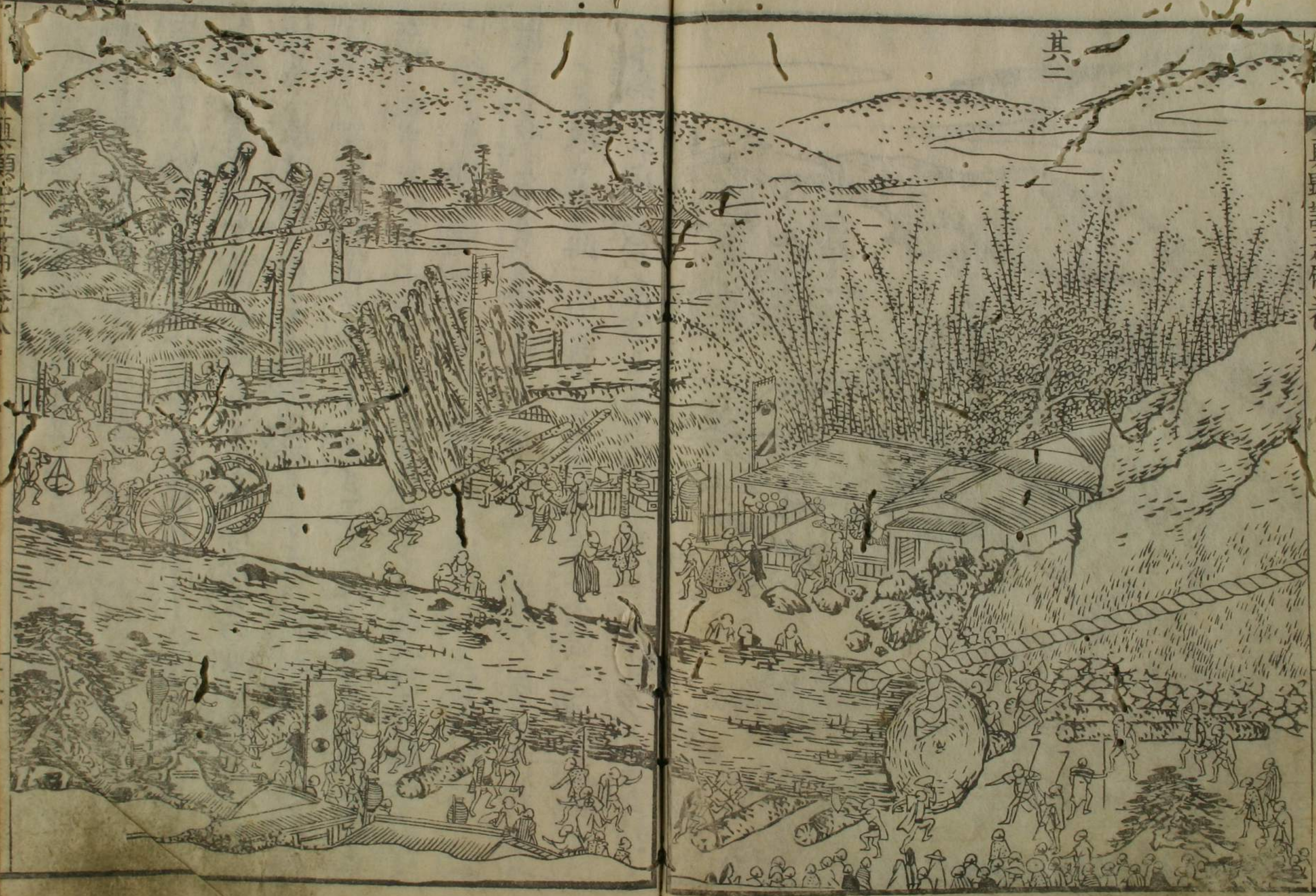
本國巨木 食山 藤瀬



本國巨木

食山 藤瀬

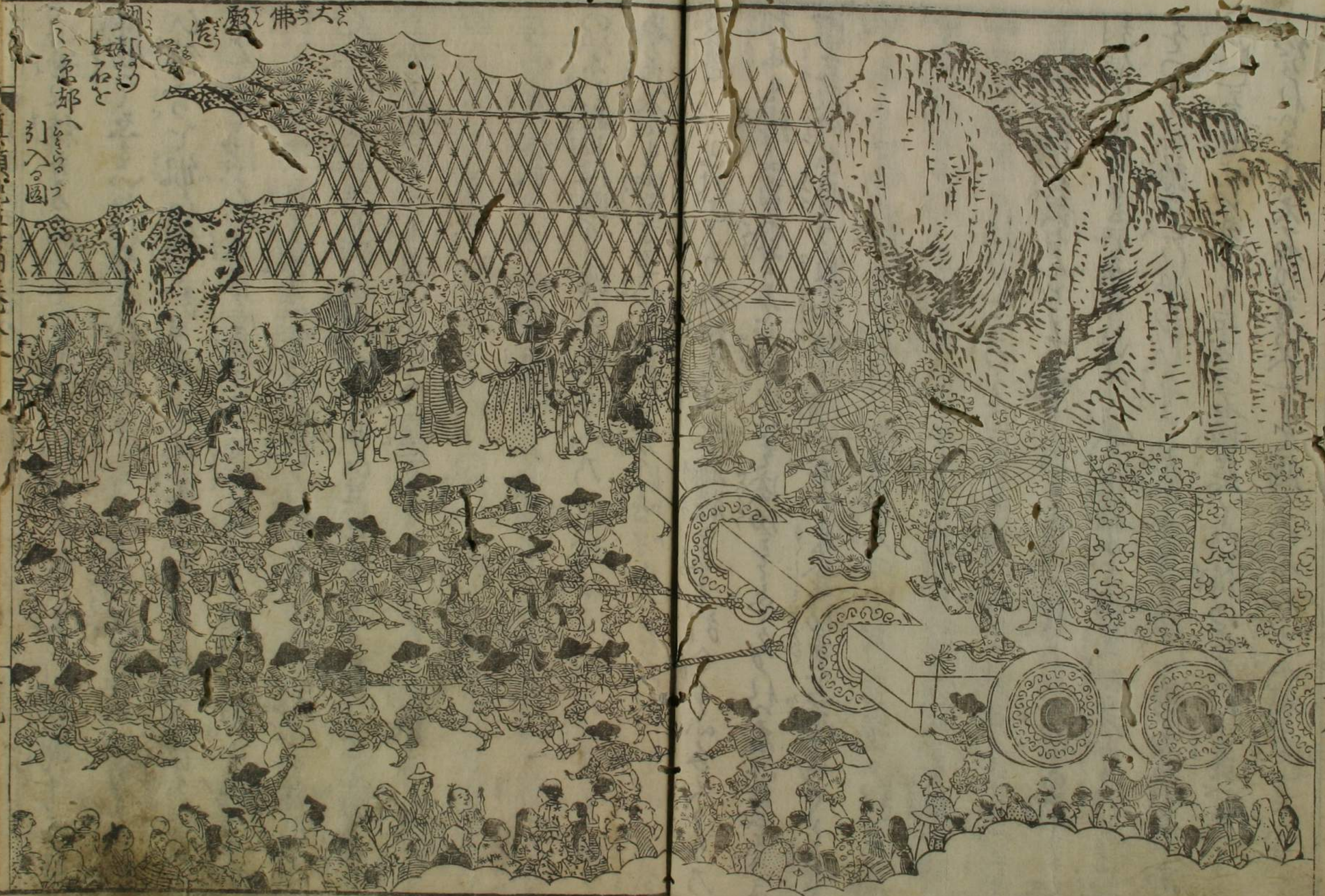
十六



其二

真觀詰五篇卷八

真觀詰五篇卷八



大仏殿

石と
引入る

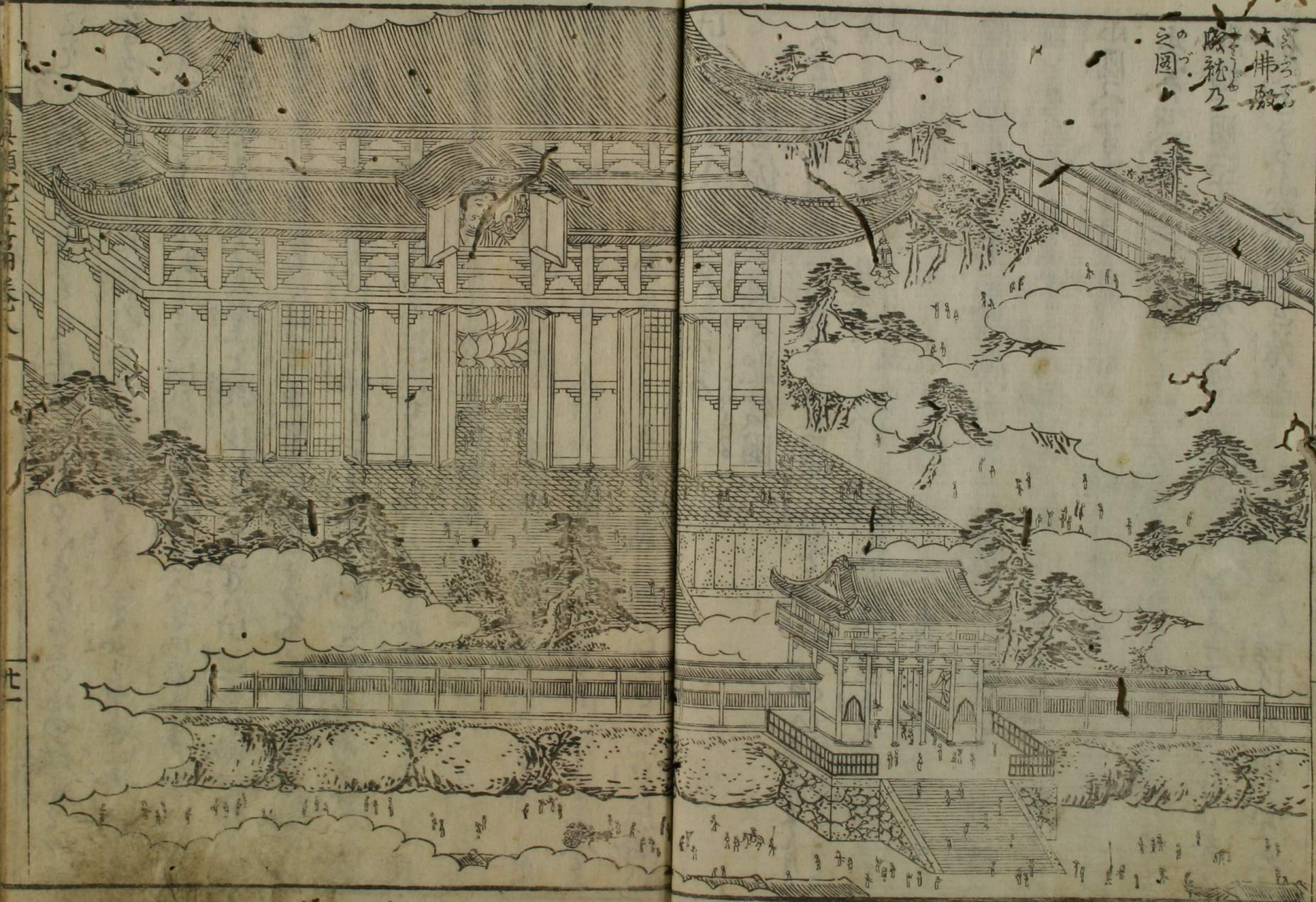
真蹟
五篇卷

廿七

け世に稀なる石とと京郊に引入石の飾人まの風流蒲生が石
 勝つて急しつらぬ其神の出匠に或は妓女唱婦などあやなくも
 い飾弓と御い綱と引日毎に大佛前と引つて京中京外と
 月んとくはいあや雲のぞく霞と仰り山門より朝と暮るる令
 別神を要者そよ三よ余又洪禱と傳て是とかけ教奉の後終り
 大殿面廊及び山門種樓令く調い其功にせむ新り号と方磨る
 と稱ひえこの天田け荒の地をまうてよりこ處那ろ大殿
 の人乃力りて造り出さるん例えは東邊華日院の所に隣て
 一ツの山乃漏出しく雨霞の終間よりきりく後光り出る棟の瓦令
 の風本朝日に照り漏い遠道人乃目瓜勢りし秋来り雲ゆる
 ぬる人令り洪宇のふ小翼と旁以啼呼来る吉云の權勢後後或
 け二のをみてるぞと一知はるる

賜依々陸奥守肥後國

天正十八年六月関白秀吉云九國中國を平治し給ひ
 秀吉云九尺征伐の序後其勢よくとくどとまがうく肥後の熊本と凱陣
 爰に略して右國記拾遺に記を編成と候て見たり
 賜依々陸奥守成政又賜依々抑け
 成政の信長云豊沛の後屢秀吉云に款對せし者わらう二度此國
 威と多し秀吉云の軍門に降と乞ひ報して首と終る者わら
 小國又小國のまも物終るも收んで忠と盡れべきは海系の後
 秀吉云一懸の忠義をかくしむと教奉り終る内又西國乃要地
 肥後二國六十余万石瓜瓞傳り信長より終るる而飲誠中い又千方
 石にまざる小我い破と陸系にまうるるに増し大福と給ぬる

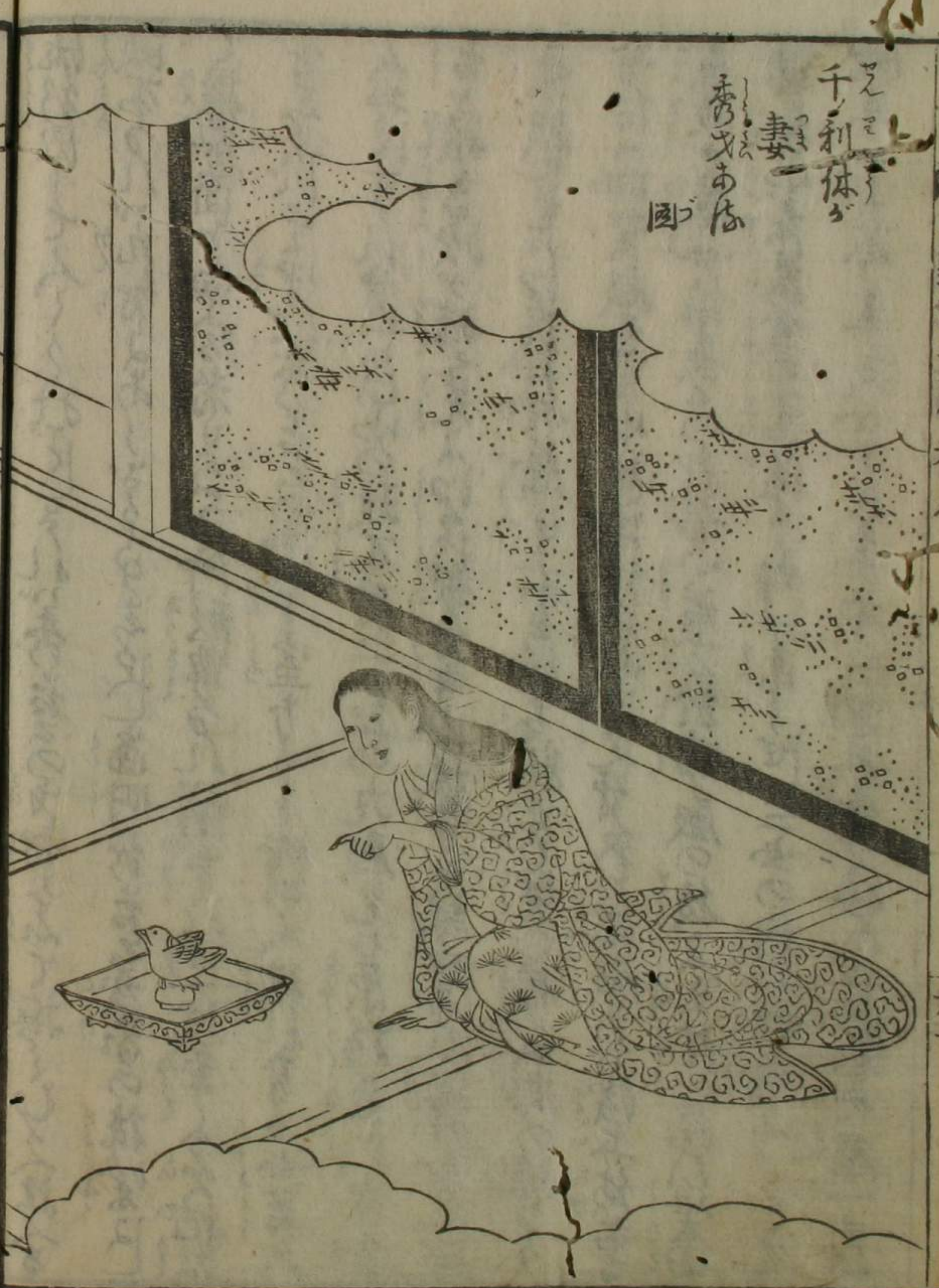


真
顯
聖
王
廟
卷
八
之
圖
乃
佛
殿

真顯聖王廟卷八

こそ源義朝のあつたを委さんと見ゆる小春の吉云の山の政云と
 なる信長云乃足將政後出右邊門が女八重女と申せ河方方
 を才智あくまをわくけけの諸侯を奉るとの及ぶるの流
 云云甲斐より後り大業と神話いふるすけけの賜け給ふが
 加方りたは秀吉云政云の才智九人の及ぶる名あつて度神
 一給ひぬまぐけ時代の風俗としてるきと婚(き)と文ある妻と
 是と妻と同斗を後み空澄さるるの押りて皆介なりけけ千利
 体が妻と才智勝とてありた利体は是と妻とを以てあつた
 の香爐と雷り得く秘苑とてふ何と申ん格好はきをわくと
 妻と心と相違ふ小妻のつよけ香爐今一分斗足は切せぬと
 利体もをわけてはぬと云うとて妻の河は流いぬを給けけ乃

流はけて人くくせじとしか秀吉云の才智を以て撰むと後
 政云んが九智あつたさるるの志は出時秀吉云武家の棟梁は
 て權勢面と向ふ者りたき河形勢をんが國中にきかるる女妃
 をわけて中は秀吉云の河本室方りと時の人思ひなる女君
 人母はまはつ一け山の政云二の松の丸殿をい系極長門守を
 吉が娘も次が妹之先よは親善青山の棟梁とて琴強の娘君を三
 系殿之をいはる日輝生右邊秀吉の娘氏郷の妹なり
 分付い加加殿をいし山國諸侯の妹君之を又い渡殿をい清井は秀
 長政の息女信長云の御妹小若方於市殿の後よ出生し給ひ世
 勝家小左衛門の若送り也(三)三女の内の姉妹なりとて
 何年十九今年天正十八年二十三女も給ひ容顏英廉一と



千利休
妻
秀吉の
國

七三

真景

笑の媚方る傾國の次女を去る国婦の中又第一位の魁之者声
 の妙なるの愛のま霞をかく晴ごとく心侮みひて元伶俐なり
 を多し爽み余り情あり人若後殿の一言を得る時の死とと又
 ひとそをなけんゆと需む徳と性実徳方く甘得く嫉を
 添く人を殺して殺さうとせは肉を喰ひ骨を碎くは死か
 才智の政本に對面をばし(其中政本の篤実の明後殿の虚慧
 の智之若政所を廢して後殿一人を心の侮み威と多しせは唐乃
 則天皇后我朝の危お軍政の方いしをに勝るべき侮之けけ
 又政本と後殿と左右に互論と才と用一智と兼いせ後殿
 中の二の軍としてそ中凡そ三也妃国婦双方よおと政本には後
 殿も愛し我の漆針と構へく恥辱をよへ入り白地よ舌戦)國中乃

我一人をいれどとふり恰も我國諸侯の國境のどしそ一方の政
 本と魁首として三帝殿加々殿乞が副より忠居よいおこの方朝
 日の局も御味方方より一方の後殿を大おとして松の丸殿副おより
 心業危おしけ堂の功を若くして後殿も添く我も思言はそお春日
 局雪どの方を厲し兼うとるかくれどく内の威勢盛ん方るは依
 て諸國大名御家人の武士け二方の吹拳はゆりおの心いさる幸と得
 後云にうりての功ありそと覆りつるさか下下の近居外換の武士お
 皆國中へ媚つしいさる幸と我いさる若はしま猛虎も園に入
 尾と棄て食と求むるもや仇々陸奥守成政け時秀若も此膝を
 頼るもいさふせしそ若免おんゆと我いぬまは心の政所入後殿
 志をたむびこの以茶の流りて園教茶屋の物好茶命の



皇后之像
Kōshū no E



北政所之像
Kitasakura no E

東照宮御影繪卷八

九四

外に其の程の程として其の政其用に當るべきありと
 而まへに進み高き程の力を以て執入河機城に入るといふ
 ありき其の河名思ふにおかひ終に肥後熊本の城をとりて
 にもる程の程として其の政其用に當るべきありと
 の言葉にふくむるものと違ふ大おふけは生れた度度程にて日
 本乃土地狭くして功臣よからふるふ足は思ひ程の程大明
 を切なく居城を伴へん大志乃母に程の程大膽不敵の佐々成政
 悉に飽く程の程新征伐の先鋒たりしとんと西國の要地肥後後本
 をよへ給ふしとあるまじいありは討つ佐々成政の六月十五日朝
 飲肥後後本に入國し再び武門の花開け栄花のまよをよへ給ふ
 と家のよ良等た勇の程の程は限るは成政國政とて其の程の程

坂戸の程の程國中の郡を治まりて入國と笑ひを中し富山
 麻山本三郡の程の程後本但馬守とて者程て来りて成政を
 をまうひ程の程程の程は程の程國中の諸士とて其の程の程
 とて肥後後本の程の程程の程程の程程の程程の程程の程程の程
 に登進し日吉を其の程の程程の程程の程程の程程の程程の程程の程
 馬守の程の程程の程程の程程の程程の程程の程程の程程の程程の程
 其冊と問ひ但馬守赤沢の本とて程の程程の程程の程程の程程の程程の程
 勢と近集り富山郡後本の城を籠城する程の程程の程程の程程の程程の程程の程
 成政の軍勢と信じてお崩せし家臣佐々成政の佐々成政の佐々成政の佐々成政
 助系村の三回村勝た諸門を治りて後本の城を籠城する程の程程の程程の程程の程程の程程の程

肥後後本
 佐々成政

繪本古図記五篇卷之八終

中より攻めし退き陣とていふなり

繪本古図記五篇卷之八終

